ミヤマカラスアゲハとカラスアゲハの自然交尾

広　井　昭　男

A natural pairing between a male *Papilio bianor dehaani* C. et R. FELDER and a female *Papilio maackii* FENTON

By AKIO HIROI

1961年の阿江茂氏の論文「アゲハチョウ科の種間雑種の研究」を読み，アゲハチョウ属の自然雑交の♀を採集したいと思い，野外採集の機会あるごとに注意を怠らなかった。たまたま1965年8月3日，山梨県北巨摩郡甘利山へ採集を試みた折，ミヤマカラスアゲハ♀ (*Papilio maackii tutanus* FENTON) とカラスアゲハ♂ (*Papilio bianor dehaanii* C. et R. FELDER) が交尾しているのを発見し，同♀より雑種幼虫を得ることができた。過去数年注意してきたにもかかわらず，これ以前には自然状態において雑交しているものは発見したことがないので，この例は珍しいものと思い，ここに交尾の観察とその後の経過を報告する。

当日は晴天無風であった。甘利山椹池に至る灌木の多い曲りくねった山道の中腹（標高約1200m）付近において，午前9時5分，山側の斜面右側の灌木に交尾中のミヤマカラスアゲハ♀とカラスアゲハ♂が静止しているのを発見した。ミヤマカラスアゲハ♀は上部に翅を開いてとまり，カラスアゲハは翅を閉じてぶら下がり，腹部の収縮運動が認められた。この状態で28分が経過したとき♂は落下するように離れたので，飛翔寸前を採集した。♀はそのままの姿勢で灌木を登るような動作を示して後，飛び出そうとしたところを採集した。カラスアゲハ♂の方はかなり破損しており，羽化後少なくも数日は経ているものと思われたが，ミヤマカラスアゲハ♀の方は新鮮で翅脈も未だやわらかな羽化直後のものであった。甘利山では両種とも普通で個体数も多いとされているが，私の見た範囲ではミヤマカラスアゲハは少なく，カラスアゲハが圧倒的に多いようであった。中腹～山麓付近で夕刻前などに山路の水たまりに来集する個体をみてもほとんど全部がカラスアゲハであった。

このミヤマカラスアゲハの♀は生かして持ち帰り，採卵およびその後の観察を高倉忠博氏に依頼した。同氏によれば8月7日に庭のキハダに木綿の袋をかけて採卵したところ，8月15日頃死亡するまでに約130卵を産んだが，1卵のみ8月16日にふ化し，他は黒変または乾固して幼虫の形成が認められなかったとのことである。なおふ化した幼虫は終令にまで達したが成熟せず死亡した由で，2令以後はカラスアゲハよりミヤマカラスアゲハの幼虫に似ていたが，腹部後端の突起はミヤマカラスアゲハほど長くなく，また終令幼虫の胸部の黄色帯も緑色を帯びていたと私に報告された。

このように雑交した♀から得られた卵は，人工・自然交配のいずれの場合でもふ化率が悪く，まれに生じた幼虫も生活力に乏しく，その飼育の成功率はきわめて低いと結論できるように思われる。なお一層今後も種々の雑交例を野外に求めて，阿江氏の実験の自然における追試ともいうべき研究を続けたく思っている。

この報告を作るにあたって採卵および飼育を御引受け頂き，終始御助力をたまわった高倉忠博氏に厚く御礼申し上げます。またこの報告に目を通して頂いた阿江茂氏，日ごろ御指導を頂く野上雅生氏に深く感謝致します。

SUMMARY

In August 1965 the writer witnessed a pairing between a female *Papilio maackii* and a male *Papilio bianor* at a point about 1,200m above sea level near Mt. Amari, Yamanashi Prefecture.

1) 東京都練馬区栄町 46

After the butterflies parted they were collected separately, and the female, then very fresh, was later entrusted to an LSJ member for egg-laying. The female laid altogether about 130 eggs on *Phellodendron amurense*, but only one of them produced a larva, the rest either rotting or shrinking. The larva, more like that of *P. maackii* than to *P. bianor* in outlook, grew until after the fourth moult. However, its growth stopped soon afterwards and died. As Dr. S. A. Ae (Tyō to Ga, Vol. XII, Pt. 4, 1961) has indicated, the hatchability of eggs and the vitality of hybrid larvae seem to be poor between these two species, no matter how the hybridizing pairing may be effected either artificially or spontaneously.

参考文献

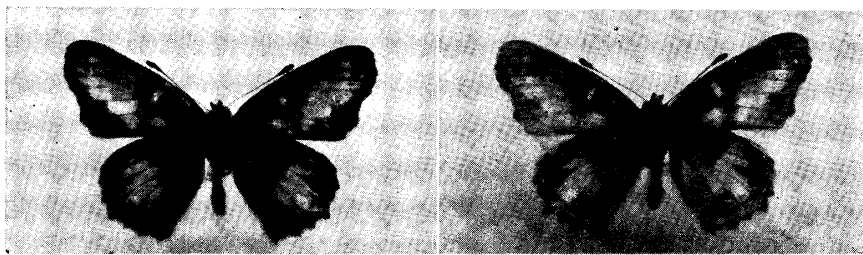
阿江茂 (1961), アゲハチョウ属の種間雑種の研究, 蝶と蛾, 12：65—89.
—— (1962), カラスアゲハ・ミヤマカラスアゲハ間の種間雑種の諸問題, アカデミア, 33：21—28.
白水隆・原 章 (1962), 日本蝶類幼虫大図鑑 (保育社, 大阪)。

北海道産サカハチチョウの異常型

神 田 正 五[1)]

An aberrant form of *Araschnia burejana strigosa* Butler found in Hokkaido

By Shyogo Kanda

Araschnia 属2種の季節的変異は最も著名であり，飼育実験等により春型・夏型のいずれにも属しない斑紋異常型が得られているが，著者は1964年，北海道定山渓（八剣山）へジョウザンシジミを採集に行った際，花上に止っている *Araschnia burejana strigosa* Butler サカハチチョウの斑紋異常型を採集した。

サカハチチョウの異常型♂（左，表面；右，裏面）

このように，自然界に於て本種の異常型を採集したということは珍しいことで，本種の変異傾向の研究に何らかの参考になると思い，ここに報告します。

北海道定山渓（八剣山南登山口附近），1♂，1964年5月17日，神田正五採集ならびに保管，前翅長18mm.

採集した異常型は当然 *strigosa*（春型）となるべき個体であるが，前後翅表面は橙褐色鱗と黒色鱗による帯状模様は認められず（前翅中室端および第1室にその痕跡らしき橙褐色鱗が認められる），橙褐色鱗が融合，発達して一大橙褐色紋となり，色彩は基本型（春型）のそれより明るく黄味をおびる。

前後翅裏面は *strigosa, fallax*（春，夏型）共に見られる一文字の模様は認められず，共にその基部の濃褐色部を除き *strigosa*（春型）の一文字模様を形成する乳白色鱗により大半が占められる。また亜外縁部には細黒帯紋が走る。

1) 北海道苫小牧市汐見町 46